

戦後のメディアイベントと都市のまなざし：
1950年代の健康優良児童表彰事業を事例として

“The Healthiest Child in the Country” Contest in the 1950s:
A Postwar Media Event and the Urban Gaze

高井昌史

Masashi Takai

早稲大学スポーツ科学学術院

Waseda University, Faculty of Sport Sciences

キーワード：健康、子ども、メディアイベント、1950年代

Key Words: Health, Child, Media Event, 1950s

抄録

本論考は、戦後のメディアイベント、特に「健康優良児童表彰事業」(朝日新聞社主催)に焦点をあて、子どもの健康に関する言説を分析する。先行研究では主に戦前の健康優良児表彰が議論の対象となり、メディアイベントの社会的機能、ナショナルな欲望などが考察されていた。しかしながら本論考の目的は、戦後から1960年までの朝日新聞の言説を分析し、言説の中にみられるポリティクスを明らかにすることである。

戦後の健康優良日本一は、ほとんどが裕福な家庭から選出されていたが、ときおり農村や貧困な家庭からも生まれていた。農村出身の健康優良日本一は、朝日新聞のなかでどのように描かれていたのであろうか。その表象は、戦後という時代、および都市部と農村部のヒエラルキーと密接な関わりをもっていた。

本論考の分析機軸として、「子ども観」に関わるもの(「大人志向」と「子ども志向」)および「文明観」に関わるもの(「文明信仰」)を用いている。都市は、言説の中で農村を時には排除し、時に包摂する。その際に「大人志向」と「子ども志向」および「文明信仰」はアンビバレントな形で強調されていた。

さらに、「排除と包摂」の構造そのものも決して単純なものではなく、その構造は二重性を帯びていたのである。以上のような事実を、朝日新聞に描かれた健康優良児の言説を分析することによって明らかにしている。

スポーツ科学研究, 5, 108-119, 2008 年, 受付日: 2007 年 11 月 16 日, 受理日: 2008 年 5 月 8 日

連絡先: 高井昌史 早稲田大学スポーツ科学学術院 359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

TEL: 04-2947-6914 E-mail: fukinotouww@uri.waseda.jp

I. はじめに

かつて、P・アリエスは『子供の誕生』のなかで「子どもという概念は近代社会の産物である」という論を展開した。これは同時に、近代社会においてはじめて「子ども期」という概念が承認され、社会で重要視されはじめたことを物語っている。「子ども」という存在

が注目される中で、社会において望ましいとされる子ども像も極めて多様化した。「元気な子ども」「勉強にはげむ子ども」「しっかりした子ども」「純真な子ども」「素直な子ども」「可愛い子ども」など、望ましい子ども像は枚挙にいとまがない。さらに、子どもであっても「男の子らしく」「女の子らしく」などのジェンダー

性が加わる。あるいは、親の階層や子どもの在籍学校の校風、あるいはその年齢などによって、子どもに求められるものは大きく違ふであろう。それは、あるときは「お坊ちゃん」「お嬢さま」「優等生」のような子ども像かもしれないし、またあるときは「ガキ大将」「おてんば」といったイメージかもしれない。

このように、社会が求める望ましい子ども像は多種多様であり、決して一枚岩ではない。しかしながら、望ましい子ども像を制定し、その日本一を競わせるという事業がかつて存在した。それがいわゆる「全日本健康優良児童表彰事業」(1930 年～1978 年)である。1920 年代には東京日日新聞社の「こども博覧会」や「健康増進運動」、日本放送協会の「ラジオ体操」など、「健康」をテーマとしたメディアイベントがさかんにおこなわれるようになった。健康優良児表彰もその流れのなかで、「健康」と「子供」に焦点を当てた事業と言えるであろう。このメディアイベントは「日本一の健康優良児」を選び出し、表彰することを目的としており、その名称が示すように、全国各地から男女の健康な子ども(主として小学校 6 年生)が集められ、イベントは行なわれた。

もちろん、子どもであれ、老人であれ、健康であるにこしたことはない。しかしながら、なぜそこに競争原理を持ち出し、「日本一」を選び出そうとしたのであろうか。ちなみに、この事業は朝日新聞社主宰のメディアイベントであったが、選定委員会には多くの文部省(戦後は厚生省も加わる)の役人が関与しており、国家が全面的に協力したイベントと考えても間違いではないであろう。国家という枠組みのもとで子どもたちが「健康」を競うという、ある種異様なイベントが誕生したのである。健康を「目指すもの」とするだけでなく「競う」ものとして設定したのである。同新聞社が主催する「夏の全国高校野球選手権大会」ほどではないにしても、「健康優良児」という言葉が普通名詞として使われるほどになり、この事業は朝日新聞社を代表するメディアイベントのひとつとなった。

II. 先行研究の検討と本論考の目的

健康優良児表彰をメディア論、あるいは「まなざし」

という点から分析したのは、有山輝夫、田中聡、中村喜代子、石岡学である¹。田中は、1930 年代に朝日新聞に掲載された健康優良児表彰について、「これこそ人間を人形と化して展示するという江戸川乱歩の夢想した公衆衛生展覧会の世界そのままではないか。健康な青少年少女たちの生ける人形展覧会だ」(田中 1994:164)と述べ、朝日新聞が子どもたちを国民の模範的身体として衆目にさらしたことを批判的に検討している。中村は、朝日新聞紙上に掲載された健康優良児の写真が「上半身裸」でかつ「直立不動の姿勢を保持している」こと、さらに「写真の背景にはグリッドがある」ことを指摘し、「これは、写されている身体が、あらかじめ『身体検査』という科学的なまなざしをめぐりぬけてきた身体、つまり計測された身体であることをヴィジュアルに示している」(中村 2001:174)と結論づけている。石岡学は表彰事業が報道された戦前の朝日新聞の記事を分析し、健康優良児を「身体・知能・精神全てにおいて卓越した子ども」として「理想の子ども像が具現化されたシンボルであった」(石岡 2004:80)と述べている。

この健康優良児表彰について最もすぐれた分析を残しているのが、メディアイベントという観点から議論した有山輝雄である。有山は、健康が現代社会において普遍的価値を持つかのように語られている事実を指摘し、その健康という「見えない集合的意識が顕在化してくる機会の一つ」もしくは「意識的あるいは無意識的に健康であることを強制する力のメカニズム」としてマス・メディアがつくるメディアイベントの存在を挙げている(有山 1998:4)。

以上のように先行研究を検討した結果、いくつかの特徴が現れる。第一に、戦前を研究対象としたものがほとんどであり、戦後の健康優良児表彰を取り上げた研究は、管見の限りではみられない。新聞報道を分析した石岡も、分析範囲は 1930 年から 1942 年までであった。第二に、分析範囲が戦前であったためか、先行研究は多かれ少なかれ「戦前のナショナリズム」に視点がおかれている。もちろん、戦前の健康優良児表彰は 15 年戦争とほとんど時代が重なっており、健康優良児をナショナルな欲望の産物と

考えることは間違いではない。しかしながら、優良児表彰は1949年にすぐさま復活し、戦後から高度成長期の日本においても大々的に行われてきたという事実を忘れてはならない。したがって、戦後の日本を考える際にも極めて重要なイベントということが可能であろう。

第三に、有山が論じたような、メディアイベントにおける「集合的意識」の顕在化、あるいはメディアイベントが「集合的意識」に与える影響などを強調するものがある。もっとも、これは「健康優良児表彰」だけではなく、メディアイベント論からのアプローチと言えらるであろう。メディアイベントが持つ集合的意識の顕在化機能については、D・ダヤーンとE・カツが次のように述べている。

「私たちはメディアイベントを、社会にとっての何らかの中心的な価値や、集団的記憶の一面にスポーツを当てる祭日だと考えている。しばしばこうしたイベントは、社会の理想化された姿を描き出し、そのあるがままの姿ではなく、むしろそれが熱望するものを想起させる」(Dayan and Katz 1992=1996:10)。

だが、メディアイベントが浮き彫りにするものは、社会の理想化された姿だけではないし、ましてやナショナルな欲望だけでもない。本論考の目的は、主に戦後の優良児表彰復活(1949年)から1960年前後までの朝日新聞を分析し、健康を語る言説空間におけるポリティクスを明らかにすることである。先行研究がすでに論じているように、戦前の言説には明らかにナショナリズムという観点からのポリティクスがみられた。では、戦後の言説ではあらゆるポリティクスが消え去ったのであろうか。

戦後、朝日新聞は毎年「文化の日」に健康優良児表彰に関する特集を組み、そのなかで健康優良日本一児童の特徴を描いてきた。全国で各都道府県の代表が選ばれ、東京の朝日新聞社に集まり、そして、男女ひとりずつ「日本一」が決定されたのである。なお「準日本一」には、男女各1～2名(「該当者な

し」の年もあった)が選出された。朝日新聞の言説において、健康優良日本一に選ばれる子どもたちは、単に発育が良くて運動神経にすぐれた少年少女として描かれているわけではない。「学業成績優秀」であったり、「厚い人望」をもっていたり、「インテリ志向」であったり、親が会社社長であったりと、健康面以外の要素が強調される傾向があった。では、朝日新聞はそれぞれの健康優良児たちをどのように描いたのだろうか。ここで問題にしたいのは、健康な子どもをみる「まなざし」の問題なのである。「まなざし」といっても、M・フーコーが議論したような規律・訓練にかかわるものではない。かつて見田宗介は「まなざしの地獄」という論考のなかで、都市と農村のヒエラルキー、それによって農村青年のアイデンティティが崩壊してゆくプロセスを浮き彫りにした。本稿で論じたいのは、メディアイベントにおける言説空間の力学、およびその重層性なのである。

なお、戦後の健康優良児表彰事業は、1949年に復活した。そして、朝日新聞では、毎年11月3日(文化の日)に健康優良児表彰事業に関する記事を特集している(以下、「特集記事」とする)。本論考では主として特集記事の言説を中心に分析をすすめる。

「特集記事」において、朝日新聞が健康優良日本一をどのように表象したのか。健康優良児の表象を中心として、戦後の優良児表彰事業における言説空間のポリティクスを明らかにしたい。

Ⅲ. 都市の視線と「子ども観」および「文明観」

1. 「大人志向」と「子ども志向」のアンビバレンス

そもそも、一般的に子どもを賞賛する際には、大きくふたつの方向性が考えられる。まずは、子どもが純粹無垢であったり、愛くるしい存在であったりすることを美化し、強調するようなメディア言説である。これを便宜的に「子ども志向」²⁾と呼ぶこととする。一方、子どもがしっかりしていること、明確な目的を持っていることに高い価値を与えるような言説も存在する。このような賞賛の仕方を、便宜的に「大人志向」としよう。重要なことであるが、「子ども志向」および「大人志向」は、社会の中で必ずしもプラスに評価されるわけではな

い。例えば、「子ども志向」は「子どもっぽい」「しっかりしていない」「幼稚である」などマイナスの意味を与えられることもあるし、「大人志向」も「可愛げがない」「子どもらしくない」など、同様に必ずしも賞賛されるとは限らない。しかしながら、朝日新聞の健康優良児日本一の言説では、「子ども志向」も「大人志向」も共に、高い評価の対象となっているのが特徴的である³。

「特集記事」において健康優良児は、概して「子ども志向」の言説で語られることが多い。これは男女ともに共通していることであり、「子ども志向」を意味する表現がしばしばみられる。例えば、『お母さんがとても喜んで下さいました。ワタシもうれしい』とホオを赤くした(1949年 東京都中野区 女子)⁴、「明るく、のんびりした性格」(1955年 福島県会津若松市 女子)⁵、「静かな城下町で育っただけに、のんびりとした性格だ」(1961年 滋賀県彦根市 男子)⁶、「動物好き」(1962年 広島県広島市 女子)⁷、「明るく、おチャメ」(1963 京都市出身 女子)⁸などである。このように、健康優良児たちの可愛らしさが強調され、純粋無垢な存在として表象されるのである。かつて『赤い鳥』などの児童文学雑誌が志向したような、純粋なイメージを健康優良児は体現していたのである。

もちろん、健康優良児は男女ともに「大人志向」の言説で語られることもある。この場合、健康優良児が他の児童よりしっかりしていることが強調される。すなわち、ときには「子ども志向」で賞賛され、ときには「大人志向」で賞賛されるという、一見矛盾した側面を持っているのである。例えば、「真面目で、世話好き」(1952年 香川県丸亀市 女子)⁹、「クラスメートからお姉さんのように慕われているという。一男三女の一番のお姉さんで、両親が朝寝坊していても、弟妹の面倒をみて登校するという日課が、Tさんの落ちついた性格をつくった」(1954年 静岡県吉原市 女子)¹⁰などである。さらに、同一の健康優良児が「子ども志向」と「大人志向」をセットにして語られることもしばしばである。すなわち、健康優良児の言説では、矛盾した二つの方向性のほめ言葉が、同一の人物を語るうえで同居していることも決してめずらしくはな

いのだ。例えば、「ずっと学級委員をつとめ、みんなから『おねんさん』あつかい・・・(中略)・・・この『日本一のお嬢さん』は『将来なんになりたいの』と聞かれると、ニコリしながら首をかしげる」(1957年 岡山県笠岡市 女子)¹¹、「茶目な東京っ子・・・(中略)・・・将来は大学を出て一本立ちするつもりだという」(1958年 東京都出身 女子)¹²などである。

大人らしくしっかりとした側面もあり、かつ子どもらしく純粋でもある。お互いの志向がお互いを否定せず、「あるべき子どもの姿」を表象しているのである。すなわち、「大人志向」と「子ども志向」が共存したアンビバレントな存在として、健康優良児は描かれているのである。

2. 農村の包摂と排除

1950年代の前半において、「子ども志向」で語られる優良児は、都市部出身者よりも比較的農村出身者に特徴的である¹³。その象徴的な表現として「りんごのような赤いほお」が挙げられる。もちろん、それ以外にも「子ども志向」を表現する言葉は考えられるが、このキーワードはまさしく「純粋無垢な子ども像」を髣髴とさせる。例えば「リンゴで育った」「ホオはリンゴのように輝いている・・・涙もろいところがあり、愛されるガキ大将」(1952年 青森県 男子)¹⁴、「まるで中学生のように大きい、ホオはリンゴのように赤くあどけない」(1953年 福岡県山門郡 男子)¹⁵、「ほっぺはリンゴのように赤い」(1955年 福島県会津若松市 女子)¹⁶などである。この表現が「特集記事」のなかで使用されたのは、1949年から60年まで上記の三例であり、もちろん都市部の優良児には全く使用されていない。55年前後から「特集記事」そのものの記事面積も増加していくが、1950年代の後半から「赤いほお」という表現は完全に姿を消す。すなわち、東北や九州など、地方出身の健康優良日本一は、健康で体力・運動能力があるだけではなく、都市部の優良児以上に純粋無垢な存在として描かれていたのである。

しかし一方で、1954年11月3日、健康優良児表彰中央審査委員長であった栗山重信(医学博士)は、

「特集記事」において次のように述べている。

「(心配な傾向は)この二、三年、農村出身の優良児がだんだん減っていることだ。・・・(中略)・・・これは戦後の食糧事情などがひびいたためとも思われるが、このほか、農民の健康に対する考え方がまだ旧式だということも指摘できる。『よく太って大きくなる』というのが、農民の考える健康の概念。このため、身体ばかり大きくても、活動力、思考力、社会性などに欠ける子供が育てられる結果になるのではなかろうか」¹⁷

もともと、農村蔑視的な健康優良児言説は戦前から存在していた。例えば、1930年の朝日新聞には、「発育は文化の発達と比例 興味ある統計見出さる」という見出しで、「発育優良児の多数を出している地は東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県などの大都市を有する府県」であり、「東北、北陸地方には一人も百五十センチメートル以上の児童が見出されなかつた」¹⁸と記されている。「子どもは体格の大きいほうがすぐれている」という考えのもとに、「統計調査」という「科学的」とされた方法を用いることによって、農村の優良児は差別化されていたのである。

ちなみに、朝日新聞だけではなく、学校衛生行政にも農村と都市を分けて考える傾向があった。七木田彦彦によると、『日本ニ於ケル學校衛生ノ現状ニ関スル統計資料』(1946年2月に文部省体育局保健課が作成したものであり、昭和12年と19年の児童を体位などで比較している)には、明らかに「都市」・「農村」という二分によって調査・検討がなされており、行政は「都市」と「農村」の児童体位、発育発達状態などを自覚的に分けて考えていたという¹⁹。

ここにみられる健康優良児を評価する視点は、「子ども観」(「子ども志向」および「大人志向」)に関係するものではない。むしろ、「文明観」と表現するほうが的確である。「文明観」には、オーソドックスには「文明」を価値あるものととらえ、その発展を賞賛するという方向性がある。すなわち、科学の発達、西洋の制度や文化の導入などに高い価値を置き、基本的に

「文明」の発展をプラスの意味で解釈するような態度である。例えば、体格・体力の向上を目指すこと、学問・教養・高級文化を習得することなどが含まれるであろう。このような方向性で健康優良児を賞賛することを、便宜的に「文明信仰」と表現する。

栗山の健康優良児を評価する尺度も、明らかに「文明信仰」に根ざすものであった。東京大学名誉教授であった栗山は、戦前の第一回(1930年)から健康優良児表彰事業に携わっていた学者である。小児医学界では長きにわたって権威であり、特に戦後の1949年から1968年までの20年間は、健康優良児童表彰中央審査委員長を務めていた。したがって、戦後の全国健康優良児童表彰事業の中心的存在と言えよう。栗山は健康優良児童表彰について、毎年のように朝日新聞紙上でコメントを出しているが、1954年のコメントでは、明らかに農村を都市よりも遅れたもの、劣ったものとみなしている。その根拠は、「農民の健康に対する考え方が旧式」だという点に求められている。栗山は、記事の中で戦後の健康優良児童表彰がよりどころとしているWHOの健康理念をあらためて提示し、そのうえで農村の健康に対する考えを「旧式」と切り捨てている。ここで指摘できるのは、戦前と戦後の変容および連続性である。戦前は科学的分析・統計資料を根拠として都市の優位性をしめしていたが、戦後はWHOという先進国の基準への傾倒、すなわち「文明信仰」の論理を提示しているのである。もちろん、結果として言説の中で農村差別を生み出している点は共通している。

その背景として、都市と農村の間には経済的・文化的な格差が顕著であったこと、そして戦前および戦後においてもそれがなお続いていたことを指摘しなければならない。戦前における日本の農民と農村にたいするイメージは、「汗水流して働いても、百姓はしよせん貧乏」というものであり、戦後もこのような農民イメージはしばらくの間続いたのである。都市部では、戦後の都市産業の崩壊で生活レベルを下げざるをえなかったが、1950年から1953年にかけての朝鮮特需、さらに1956年から1957年にかけての「神武景気」などは、都市部の経済復興に勢いを与え、農村と

の格差はみるみるうちにひらいていった。1956 年の『経済白書』は「もはや戦後ではない」と述べ、「今後は近代化と技術革新が成長を支えるような構造変化が求められる」と説いた。一方で農村では、確かに戦後の農地改革は地主制度を克服し、土地の所有権を移動させることに成功した。しかしながら、経営規模の小さすぎる過小農という新たな問題を生み出した。したがって、自動耕運機などの機械の導入は過剰投資となり、収量の増加が機械化による出費を補えないという矛盾に陥っていた。1952 年から 57 年にかけての所得倍増率は、都市勤労者が 8.9 パーセントであるのに対して、農家では 3.5 パーセントにすぎなかった。この間の消費者物価上昇率は 3.3 パーセントだったため、実質的に農家所得に増加はなかったのである。²⁰

もちろん、都市と農村の問題は経済格差だけではない。より重要なのは、戦後から一貫して続いていた文化格差であり、健康優良児にひきつけて考えるならば「健康観についての思想格差」と呼べるものである。もちろん、「健康」とは多義的なものであり、どの健康観がすぐれているという客観的基準など存在しないであろう。だか、WHO の権威を背景とした「文明信仰」を基盤とし、「その価値観を身につけた都市の健康優良児と、そうではない農村の健康優良児」という認識をもつことは、「健康言説」のなかにも「都市・農村」というヒエラルキーをつくりあげた。そして既に述べたように、その根拠は戦後の「科学的・統計的資料」から「先進性健康観・旧態依然とした健康観」へと変化していたのである。

このような背景において、「健康言説」のなかで都市は農村をあるときは「子ども志向」の立場から純粋無垢なる子どもの宝庫とみなし、さらに「文明信仰」という立場から、都市に劣る旧態依然とした存在とみなしていたのである。もちろん、農村に純粋無垢なるものを見いだすことは、そうではない都市という認識を生み出し、都市のゆがみを浮き彫りにする可能性も秘めているであろう。しかしながら、言説の中では国家的な事業としての健康優良児表彰事業の特性、すなわち「日本一」という称号を与えることによって、純

粋無垢なるものを地方に求めて包摂していた。したがって、あるときは農村を「子ども志向」の論理によって国家へととりこみ、同時に農村を「文明信仰」の論理によって疎外する。ここでは、「文明信仰」と「子ども志向」が同時に機能しているのである。

健康な子どもを選定することは、一見すると都市・農村という問題とは全く関係ないように思われるかもしれない。しかしながら、健康優良児をめぐる言説空間のなかには、明らかに「農村と都市」のポリティクスがみられたのである。それでは、1950 年代半ば以降の健康優良児言説はどのように変化していったのであろうか。そこで「大人志向」という論理は、どのように機能したのであろうか。

IV. 親孝行な優良児と「大人志向」

1. 「大人志向」化する健康優良児

「特集記事」の言説では、毎年それぞれの家庭環境などが紹介されている。その家庭は、たいていの場合裕福である。基本的には男女ともにその傾向が強く、健康優良児たちは概して「お坊ちゃん」「お嬢ちゃん」なのである。だが、貧しい家庭に育った健康優良児、あるいは家業の農家を手伝う健康優良児という言説も見られる。その場合、農村の健康優良児は、「子ども志向」という面だけではなく、それ以上に勤勉かつ親孝行な大人として語られている²¹。このような言説がみられるのは、1950 年代半ば以降である。

「農繁期には兄妹そろって田に出て母を助ける」
(1953 年、福岡山門郡 男子)²²

「ゆくゆくは野球選手になりたいそうだ。そして、『立派な選手になったら、大きな家をたて、お父さんお母さんを入れるんだ』」(1957 年 群馬県山田郡 男子)²³

「戦後入植の開拓農家だから、ここまで来るのが大変だった。『最低の百姓でした』と(父の)Sさんは述懐する。・・・(中略)・・・人手が足りないので早くから家事を手伝った。両親は暗い中から畑に出る。

R君は弟のT君(10)とK君(四つ)の世話をやきながら、掃除をし、ご飯をたく。うどんをゆでることは得意中の得意。学校で『みそ汁のつくり方』を発表して先生を驚かせた。日曜日は一日中野良仕事を手伝う。県一になったとき・・・先生が『日本一になるためボール投げ、跳躍の練習をしよう』と言ったら、『ラッキョウづくりが忙しいから』と家にとんで帰ってしまった。・・・(中略)・・・先生は『悪条件にめげず、よく努力する子だ』と目を細めている。『将来なんになるつもり』と聞いたら『百姓』と胸を張って答えた(1958年 栃木県鹿沼市 男子)²⁴。

特に、1958年の健康優良児日本一は、その勤めぶり、親孝行ぶりがひととき強調されている。この日本一の少年の注目すべきは、小学校6年生にして身長165cm、体重56.2kgと、発育面で並外れているという点である。同年の準日本一が身長156cmで体重48kg、前年度の日本一が身長158.5cm、体重51kgであるから、この健康優良児の体格がいかに優れているかがわかるであろう。したがって、この優良児は体の大きさをもっと強調されてもなんら不思議ではないし、逆に栗山が述べるような批判にさらされる可能性も高いといえる。しかしながら、この優良児は健康であること、体格が優れていることも表記されているが、それよりもむしろしっかり者であり、勤勉かつ親孝行であることのほうが強調されているのである。すなわち、健康優良児が農村という舞台の中で「勤勉」かつ「親孝行」という物語の主役として描かれており、メディアの中で表象(および表彰)されているのである。

このように、地方出身の健康優良児に勤勉さが強調され、「大人志向」の点から賞賛されるのは、なぜか1950年代後半に集中しているのである。ちなみに、農家を手伝う健康優良児という言説は、1949年から事業終了の1978年にいたるまで、女子にはまったくみられない。1958年と同年の女子の健康優良児日本一も、東京都出身で「茶目な東京っ子」²⁵であり、6歳から日本舞踊を習っているお嬢様である。では、なぜこの時代の健康優良児言説(男子)には「大人

志向」プラス「親孝行」が散見されるのであろうか。

2. 核家族化と農村へのまなざし

ここで注目しなければならないのは、1955年以降における社会の変容、特に都市部の変容である。都市では1955年から核家族化が進み、落合恵美子と言う「家族の戦後体制」(落合 2004:98)が確立されていった。「家族の戦後体制」の特徴は、①女性の主婦化、②「ふたりっこ革命」(少子化、女性は適齢期に結婚し2~3人の子どもをつくるというイデオロギーの確立)である。日本の企業は1950年代の特需期から高度成長期にかけて、大量の労働力を必要とした。1950年代半ばから集団就職がはじまり、農村から都市の工業地域へ、大量の人口流出が始まったのである。都市部では、農村出身の次男・三男が仕事をもち、そこで家庭をつくることのできるような状況ができあがりつつあった。したがって、核家族化が急激に進んでいったのである。

そのような状況の中で、子どもの勤勉さや親孝行はどのように形をかえていったのであろうか。そもそも、親孝行とは何かといえばなかなか難しい問題である。行動のレベルで考えるなら、親の介護のような重いものから年少の兄弟の世話など、その過酷さは様々であろう。ただ、小中学生のレベルで考えるならば、最も簡単なものは家の手伝いなどである。しかしながら、都市部における核家族化は、子どもたちに家の手伝いの機会すら奪う結果となった。その要因は、なんといっても主婦、特に専業主婦の存在にある。

都市においては、農村のように子どもに家業を手伝わせることなどほとんど不可能となった。1956年、朝日新聞の家庭面には、健康優良児ではなく都市部の子供に一般について次のような記述がある。

「夏休みは子どもを、子どもらしく自由にせいっぱい子どもとして人間らしい生活をさせるためであるのです。『子どもらしい人間生活の基本』とは、おとなの労働を見習い、できるだけその労働に参加していくことでしょう。それには、まず理想をいえば、都会の子どもを・・・(中略)・・・農漁村の

親せきか友人の家にあずけたらどうでしょう・・・(中略)・・・。その家の子として手つだいをします。田の草とりがむずかしければ、鶏にエサをやること、草かりにいつて少しでもよいから背負わしてもらうこと。カマをもって行くだけでもいいから、できることをさせてもらうのです」²⁶。

上記の記事が示しているのは、都市部の子どもたちが親孝行どころか、家の手伝いすらできる環境ではなくなったという実状である。「子どもとしての人間らしい生活」とは、「おとなの労働を見習い、できるだけその労働に参加していくということ」だと述べられているが、この論理で考えると「子どもらしさ」イコール「大人らしさ」という、一見矛盾した結論になる。だが、この言説は都市部の子どもに『大人志向』をもとめる声」と解釈することも可能である。そのように理解すれば、この記事には何の矛盾もみられない。それは、都市部に家の手伝いもできない(もしそれをしてしまうと、主婦の仕事がなくなる)「子ども」が大量発生したことを意味している。1955 年から 75 年にかけての特殊出生率はちょうど 2.00 前後であり、三浦展はこれを「子供の 55 年体制」(三浦 1999:134)と呼んでいる。都市部の子どもの役割は、すでに家の手伝いをするのではなくなくなった。子どもはもはや労働力ではなく、勉強をして親よりも高い学歴をえることを目指していたのである。多くの親はそれを支持したが、一方で子どもの親孝行を望む声があったことも忘れてはならない。1950 年代後半には、一般メディアでも親孝行が特集されるようになった。例えば、『婦人公論』1957 年 4 月号は「今日の『親孝行』」という 44 ページにわたる特集を組んでおり、そのなかで多くの識者が「親孝行」を議論している。婦人雑誌の中で親孝行が重要なテーマとしてとりあげられるようになったのである。次のような言説は非常に興味深い。

「私たちの年代は大損だわ。子供の時は親孝行、親孝行で鍛えこまれて、さんざんムリな孝行をさせられるし、さて自分たちが親になったら、デモクラシーで、子どもの考え方は一変して、親孝行はし

なくなるし、ずい分、割に合わぬ話ね」(主婦 40 歳前後)²⁷

「親の側に言はせると、戦後の学校教育では、親孝行を教へない。だから子供たちは親を親とも思わず、理屈ばかり言って困る。・・・(中略)・・・他方、教師たち、ことに新しい教育理念に燃えてゐる若い教師たちは、とんでもないことだと反撃する・・・(中略)・・・民主主義的な社会を実現しうる人間を養成するのが、戦後教育の目的である一さういつて氣勢をあげてをります」²⁸

第一の婦人の発言には、明らかに「戦後デモクラシー」への懐疑的な態度がうかがえる。戦後の民主主義的な教育がいったい何をもたらしたのか。子どもの「非労働力化」、学校進学率の上昇による学校教育期間の長期化などとともに、都市部の親には戦前と戦後における教育の不公平感が生まれた。自身が子ども時代には戦前の「忠孝一本」的な親孝行を教え込まれ、自分が親になったらデモクラシーのために親孝行をされることがない。それを不条理であると認識し、デモクラシーに対する懐疑心が噴出しているのである。第二の親と教師の対立も、同様のことが言える。「民主主義的な社会の実現」という使命を内面化している若い教師に対して、親たちの懐疑的な態度が生まれているのである。

親孝行や勤勉性を「大人志向」とするならば、それは都市部の子どもがおかれた状況のもとで明らかに衰退しており、それをもたらしたのは戦後デモクラシーである。以上のような認識で、都市部ではそれを批判する視点が生まれていたのである。

3. 生活改善と現実の間で

では一方で、農村にはどのような変化が起こっていたのであろうか。戦後、農村では生活様式の改善が大きなテーマであった。具体的には台所の改良や農休日の設定など様々であったが、1950 年代半ば以降は子どもの教育問題も立ち上がってきたのである。例えば、1950 年代半ばにおける農村児童の労働に関する現地レポートでは、「夏休みの一ヶ月は(子

どもたちはまるでキャンプ生活を続けているようなものですよ」(中学校教務主任)、「学校がいちばんいいや。夏休みなんていらぬよ」(小、中学校の生徒たちのコメント)²⁹など、夏休みにおける農村児童たちの過酷な労働環境を問題視している。このような状況の中で、1955 年に東京駅で 7 人の地方出身の子ども(11 歳から 16 歳)が保護されるという事件が起こった。少年のなかのひとりである S 君は、「家が農家で貧しく、手伝いに追われて宿題がたまってきたので・・・(中略)・・・宿題をやっていると母親から『仕事もしないでなんだ。出て行け』としかられ、かっとなって米二斗を持出し二千五百円で売り飛ばして家出、・・・金がなくなったら自殺するつもりだった」と述べている³⁰。他の 6 人の子どもも、大体同じような理由であてもなく東京へ家出してきたという。

このような現実をふまえて、農村では生活改善の必要性を説く声も多く、その中には子どもたちの労働・教育の環境改善に関する提言も含まれていた。1950 年代後半の農村部では、労働に駆り出されている子どもをいかにして勉強させるかは、大きな課題であった。農村の子どもたちにも都市部並みの教育を受けさせるべきだという意見が、農村内部からも挙がっていたのである。すでに 1956 年には、『家の光』のなかで、農繁期に学校を休ませて子どもを働かせるべきか、親から多くの意見が寄せられていた。

「農繁期が忙しいのはわかっていますが、学業まで休むことはよくないと思います。学校を休んで働くことによって、学習意欲を失わせ、それが農村児童の学力低下の原因になっているのではないのでしょうか。農繁期に学校を休ませるのは、最小限にしたいものです」³¹。

「この問題は先生や父兄の間にも賛否両論があります。・・・(中略)・・・小学校も高学年、および中学生になると、農繁期の忙しい中で、自分も一家にとってたいせつな労働力であると自覚して、家の者といっしょになって働きます。・・・(中略)・・・しかし、毎日の忙しさに疲れて、学習意欲が欠けることは確かですし、そのための学力低下も見逃すことは

できません」³²

「農村の子どもは都会の子どもに比べて、学力が低いとか、頭が悪いということをよく聞きます。これはなぜでしょうか。都会に比べて学校の設備が十分でないということもありますが、親たちが子どもの教育に無関心なためではないかと思います。農繁期になると、一週間から十日ぐらい学校は休みになり、そのほかにも、いそがしいとすぐに休ませてしまいます。・・・子どもの教育について関心を持ちましょう」³³。

もちろん、上記のような親たちが農村の中でマジョリティであったかと言えば、そこには疑問がある。しかしながら、農村にも新しい教育観が生まれ、「百姓に学問などいらぬ」という古い考え方と対立するようになっていた。だが一方で、農村では生活改善をしたくとも、都市部と比較して現金収入が乏しいという現実があった。さらに古い慣習が伝統的な生産・労働のしくみと強く結びついていたので、理想主義や啓蒙活動によって農村の生活を変えることは、なかなか困難であった。それは、子どもの労働や教育環境についても例外ではなかった。

いずれにせよ、1950 年代後半の農村では、生活改善運動のような新しい価値観と、一方で残存する古い価値観との間でせめぎあいが生じていた。「農村の子どもたちにも都市部並みの教育を」という願いは、農村の人々が持つ「文明信仰」であったが、その実現を許さない、あるいは困難にするような因襲があった。かつて丸山眞男は、「現実」とは「本来一面において与えられたものであると同時に、他面で日々造られていくもの」(丸山 1964:172)だと語った。すなわち「現実」とは過去からの連続性にある既成事実であると同時に、人間が積極的に変えてゆくブラティカルなものなのである。農村では、丸山の言うふたつの「現実」の間で、はげしい「せめぎあい」が生じていたのだ。

しかしながら、健康優良児の「特集記事」に表象される子ども像は、現実の一方のみを反映していた。都市はその「せめぎあい」を捨象し、戦後デモクラシ

一批判の論理で農村を美化し、農村の子どもに「農民のエートス」をみようとした。都市部にとって「親を助け農業に励む息子」という物語は、「親孝行」、あるいは「子どもの勤勉」という「大人志向」の意味を付与しやすく、さらにデモクラシー批判の論理とも連動していったのだ。そもそも「農者国之本也」という農業を国の基本とするイデオロギーは、日本では古くから存在してきた。近代以降、それは「工業からとりのこされる農業を最も自然で健康的な職業とし、都市的職業と都市社会が人間を墮落させるのに対し、農業は下積みではあるが国家社会の根幹であり、農業は民族の健全な母体である」(福武 1971:21)という思想に立脚していた。もちろんその目的は、農民になにがなんでも激しい重労働に耐えるようなエートスを注入し、国家の安定をもたらすことであった。だが興味深いことは、農業を美化するこのイデオロギーが 1950 年代に健康優良児の言説の中に現れてきたという事実である。

したがって、優良児言説の中で、都市は「文明」の中に存在し、一方で農村は「大人志向」およびデモクラシー批判の論理によって、「日本一」の健康優良児として国家の中に包摂されていったのである。これは、都市部の子どもの労働がほとんど姿を消し、農村の子どもの労働観・教育観がゆらぎをみせていた 1960 年前後だったからこそ可能なことであった。1960 年代半ば以降は、都市と農村の経済・文化格差がかなり縮小しており、以上のような「農村の子ども」イコール「勤勉」という単純化した表象は極めて難しかったと考えられる³⁴。

V. 戦後のメディアイベントと「都市ー農村」のヒエラルキー

「健康優良児日本一」を決定する際、そもそも農村地域や貧困な家庭から選ばれることは決して多くはなかった。前述のように、大方の健康優良日本一は裕福な家庭から選出され、「特集記事」の中で表象されていた。もちろん、裕福ではない家庭(ほとんどの場合、農村部)から「日本一」になる優良児は存在したが、注目すべき事実は、戦後から 1960 年にかけて、

「健康優良日本一」を語る言説のなかで「都市と農村」というヒエラルキーが強固にみられたという事実である。

健康を語る言説空間の中で、都市は農村健康優良児の物語を描くことによって、農村を包摂しつつも疎外していった。さらに重要な点は「包摂・疎外」の構造そのものも二重性を帯びていたという事実である。第一に「文明信仰」と「子ども志向」による共同作業であり、第二に「戦後デモクラシーへの懐疑」と「大人志向」の共同作業である。健康優良児言説の中には、都市が「文明信仰」で農村を排除しつつ「子ども志向」で取り込む構造と、「戦後デモクラシーへの懐疑」によって自らに欠如しているものを自覚しつつ「大人志向」の論理で農村を包摂する構造が共存していたのである。

さらにくり返しになるが、戦前から戦後へと「都市と農村」のヒエラルキーは連続していた。しかしながら、それを支えるものは「科学的・統計的資料」から、WHOの基準に基づいた「新しい健康観」へと移り変わっていったのだ。ここで指摘できるのは、戦前と戦後における「連続性」および「断絶」というふたつの側面なのである。

以上のように、健康優良児表彰事業を事例として、戦後まもなく(主として 1950 年代)の「健康優良日本一」の言説を分析し、「都市・農村」というヒエラルキーを浮き彫りにしてきた。もちろん、健康優良児表彰は 1960 年代以降もひきつづき行われるのだが、その詳細な分析は今後の課題としたい。

〈注〉

¹ メディアと直接関連性を持つわけではないが、山下(2001)の議論も興味深い。山下は、健康優良児表彰における大規模な身体測定に着目し、事業によって結ばれた「模範的な子どもの身体」という一つの像が「実体的な『模範』や『標準』として転倒」することで、個々人の身体が「『模範』や『平均』、『標準』との比較対象において規律化され管理されることになった」(山下 2001:8)と論じている。

² 本論考で用いる「大人志向」「子ども志向」および「文明信仰」という分析枠組は、有山(1998)の議論から多くのヒントを得ている。

³ ちなみに、「子ども志向」「大人志向」に類似した議論はこれまでも存在している。例えば、沢山美果子は、1910年代から20年代の地方都市(岡山)を対象として、当時の親たちが持っていた教育熱について議論した。そして、当時の新中間層には「子どもの純真さや無垢という教育以前の状態を賛美する童心主義」を重視する一方で、「教育、学歴をつけることで無知な状態から子どもを脱却させる」ことにも熱心であるという、矛盾した親たちの心性を指摘している(沢山 1990:114)。広田照幸は沢山の議論を参照しつつ、「童心主義」「学歴主義」に「厳格主義」という概念を新たに付け加え、独自の議論を展開している(広田 1999:58)。しかしながら、沢山も広田も、当時の家庭あるいは学校教育の実態を論じている。本論考では、教育の実体分析ではなく、あくまでメディア言説を手がかりとして、都市が農村をまなざす際の視線の重層性を明らかにする。

⁴朝日新聞 1949年11月3日朝刊 7面
⁵朝日新聞 1955年11月3日朝刊 5面
⁶朝日新聞 1961年11月3日朝刊 10面
⁷朝日新聞 1952年11月4日朝刊 13面
⁸朝日新聞 1963年11月4日夕刊 10面
⁹朝日新聞 1957年11月3日朝刊 5面
¹⁰朝日新聞 1953年11月3日朝刊 3面
¹¹朝日新聞 1957年11月3日朝刊 7面
¹²朝日新聞 1958年11月3日朝刊 5面
¹³都市と農村を明確に区分することは容易でない。だが、1956年に五大都市とされていた大阪市(254.7万人)、名古屋市(133.7万人)、京都市(120.4万人)、横浜市(114.4万人)、神戸市(97.9万人)、さらに東京都を中心隣接都市も含めて考えるならば、少なくとも、兵庫県宝塚市(1949年)、東京都杉並区(1954)、兵庫県神戸市(1955)、東京都中央区(1958)、兵庫県芦屋市(1959)、大阪市(1960)、兵庫県西宮市(1961)、京都市(1963)、大阪市(1964)大阪市(1965)など、健康優良日本一は34名中10名が都市部から選ばれている。もちろん、その他の地域が全て農村部というわけでもなく、グレーゾーンの地域が存在する。しかしながら、明らかに農村部と推測される地域からも、健康優良日本一は誕生している。

¹⁴朝日新聞 1952年11月3日朝刊 5面
¹⁵朝日新聞 1953年11月3日朝刊 3面
¹⁶朝日新聞 1955年11月3日朝刊 5面
¹⁷朝日新聞 1954年11月3日朝刊 3面

¹⁸大阪朝日新聞 1930年4月26日朝刊 5面

¹⁹七木田文彦 和唐正勝 野村良和 柴若光昭 衛藤隆 『『日本ニ於ケル學校衛生ノ現状ニ関スル統計資料』の戦後学校保健政策上の位置』『学校保健研究』45(2), p121-144 日本学校保健学会 2003

²⁰梶井功(2005)「農業基本法」佐々木毅 他編『戦後史大辞典 増補版』三省堂 731頁

²¹ちなみに、都市部の健康優良日本一について「勤勉」「親孝行」という言説は、1949~1965年の分析期間において全くみられない。

²²朝日新聞 1953年11月3日朝刊 3面

²³朝日新聞 1957年11月3日朝刊 7面

²⁴朝日新聞 1958年11月3日朝刊 5面

²⁵朝日新聞 1958年11月3日朝刊 5面

²⁶朝日新聞 1956年7月19日夕刊 2面

²⁷『婦人公論』1957年4月 75頁

²⁸『婦人公論』1957年4月 50頁

²⁹朝日新聞 1955年8月19日夕刊 2面

³⁰朝日新聞 1955年9月1日夕刊 3面

³¹『家の光』1956年7月 239頁

³²『家の光』1956年9月 182頁

³³『家の光』1957年9月 157頁

³⁴戦後の農村婦人が子どもの教育に強い関心を持ちはじめたのは1960年代なかば以降と思われる。農村雑誌『家の光』では、戦後、乳幼児の健康などに関する記事は頻繁に登場するが、子どもの教育・健康などに関する記事はほとんど見られない。小学生以上の子どもの教育に関する記述は1960年代半ばから現れはじめ、その内容はしつけや学校へ行かせる際の注意(そろえておかなければならない勉強道具)など、都市部の親の感心とあまり変わらないものとなった。

参考文献

- ・ 有山輝雄(1998)『『健康優良児』—メディアがつくった理想の少年少女』津金澤聰廣・有山輝雄編 『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社 3-18頁
- ・ 中央公論社『婦人公論』1957年4月
- ・ Dayan, D. and Katz, E. (1992=1996) *Media events : the live broadcasting of history*, Harvard University Press. (浅見克彦 訳 『メディア イベント』青弓社)
- ・ 福武直(1971)『日本の農業』[第二版] 東京大学出版会
- ・ 広田照幸(1999)『日本人のしつけは衰退したか』

講談社現代新書

- ・家の光協会『家の光』1956年7月～1957年9月
- ・石岡学(2004)『『理想の子ども』としての健康優良児—新聞報道における健康優良児のイメージ—』『教育社会学研究』第75集 65—83頁
- ・梶井功(2005)「農業基本法」佐々木毅 他編『戦後史大辞典 増補版』三省堂 731頁
- ・丸山眞男(1964)『増補版 現代政治の思想と行動』未来社
- ・見田宗介(1979)『現代社会の社会意識』弘文堂
- ・三浦展(1999)『「家族」と「幸福」の戦後史』講談社現代新書
- ・中村喜代子(2001)『『健康優良児』表彰写真と近代日本の子どもの身体』『美術教育学』(22) 美術科教育学会誌編集委員会編 167—177頁
- ・七木田文彦 和唐正勝 野村良和 柴若光昭 衛藤隆(2003)『『日本ニ於ケル學校衛生ノ現状ニ関スル統計資料』の戦後学校保健政策上の位置』『学校保健研究』45(2)、p121-144 日本学校保健学会
- ・落合恵美子(2004)『21世紀家族へ』[第三版] 有斐閣
- ・沢山美果子(1990)「教育家族の成立」中内敏夫編『<教育>-誕生と終焉』藤原書店 108—131頁
- ・田中聡(1994)『衛生展覧会の欲望』青弓社
- ・津金澤聰廣・有山輝雄編 (1996)『近代日本のメディア・イベント』世界思想社
- ・津金澤聰廣・有山輝雄編 (2002)『戦後日本のメディア・イベント』世界思想社
- ・山下大厚(2001)「身体測定のパリティクス—子どもの身体への眼差しと健康優良児表彰—」『年報社会学論集』第14号 1—14頁